

開催 報告

産学協働イノベーション人材育成シンポジウム2025

イノベーションは心を豊かにできるか —日本文化という視点で考える—

開催日： 2025年10月31日(金) 14:15~16:45

主催： 一般社団法人産学協働イノベーション人材育成協議会(C-ENGINE)



2025年10月31日に、京都大学楽友会館にてシンポジウムを開催いたしました。「イノベーションは心を豊かにできるか」をテーマに、文化と科学の交差点から創造の源を探り、講演・座談会・学生発表を通して産学の協働と新たな気づきをみなさまと共有いたしました。

※開催報告Webページより録画を公開しています。是非ご覧ください。 <https://www.c-engine.org/2025/11/11/11840/>

開会挨拶

C-ENGINE代表理事 國府 寛司（京都大学理事・副学長）

國府寛司代表理事は開会にあたり、来賓への謝意を述べるとともに、C-ENGINEが2014年の設立以来、大学院生を対象に研究インターンシップを実施し、累計777件のマッチングを達成したことを紹介しました。学生の研究力向上と産学の知の交流を目的とする本プログラムの意義を改めて強調し、RISEによるトランスフェラブルスキルの体系化や国際的なEmployabilityの視点にも言及しました。今年のテーマ「イノベーションは心を豊かにできるか—日本文化という視点で考える」に触れ、科学技術と文化の関係を考える契機とすることを呼びかけました。



ご来賓挨拶

経済産業省イノベーション・環境局
大学連携推進室長 川上 悟史 氏



我が国は賃上げや設備投資を軸に新たな成長軌道へ移行しつつある一方、物価上昇や人材逼迫など不確実性が高まる中で、高付加価値を創出する人材育成の重要性をご指摘いただきました。科学とビジネスの近接が進み、企業が基礎科学の段階から産業化を見据えた投資を進める潮流を踏まえ、C-ENGINEによる中長期研究インターンを通じた実践的な人材育成を高く評価いただきました。また、今後も博士人材の企業での活躍促進やインターンシップの拡充を産学連携で進める方針とともに、協議会への期待が述べられました。

文部科学省高等教育局学生支援課長 春山 浩康 氏



学生のキャリア形成支援を推進する中で、特に大学院生のインターンシップは、個別の大学のみでの企業との連携は難しく、十分に進んでいない現状があることが指摘されました。その中で、C-ENGINEが複数大学・企業による研究インターンシップを就職目的に限定せず推進している点を、大学院生向けインターンの一つの理想形として高く評価いただきました。博士人材の育成・多様なキャリアパス支援の観点から、ジョブ型研究インターン等の推進に引き続き取り組むとともに、C-ENGINEのさらなる発展への期待が示されました。

C-ENGINEについて

C-ENGINE事業責任者 藤森 義弘

C-ENGINEでは毎年、大学役員・企業幹部および実務者との意見交換を行い、産学協働体制のもとで研究インターンシップを推進しています。インターンシップテーマについては、問題の新規性×手法の新旧で整理し、学生がいずれかの領域で知的貢献することを特徴としています。また、2016年に「一人前の研究者」育成を掲げ、研究者に求められるトランスフェラブルスキルを可視化する枠組みとしてRISEを策定し、学生のスキル意識化と成長支援に活用しています。近年の国際的議論でも博士人材に求められるスキルフレームワークが示され、RISEとの親和性が確認されていることから、RISEは博士人材の雇用機会拡大に資する教育プログラムとしても位置づけられると述べ、大学・企業に活用を呼びかけました。



研究インターンシップ体験報告

京都大学大学院理学研究科物理学・宇宙物理学専攻
疋田 純也 さん

三菱電機にて1か月間の研究インターンシップを実施しました。アカデミアでの将来や自らの研究力に対する不安を背景に、全く異なる分野へ挑戦する目的で参加し、金属3Dプリンタに音響センサーを導入した異常検知手法の検討に取り組みました。自身で主体的に試行錯誤を重ね、センサー設置位置や信号取得の検証を進め、異常検知に向けた研究を前進させました。その結果、異分野でも研究力が活かせることを確認し、自信を獲得するとともに、企業における研究活動の具体的なイメージを得たと報告しました。



奈良女子大学大学院人間文化総合科学研究科
自然科学専攻 竹内 陽香 さん

ダイキン工業で6週間の研究インターンシップを実施しました。工学分野の知識がない中で、熱交換器のパス取り最適化アルゴリズム開発に取り組み、従来の評価指標に加えてエントロピーを用いた新たな視点を提案しました。インターンシップに参加した目的は、異分野での価値創出経験とキャリア観の明確化であり、企業での研究プロセスを理解するとともに、対話力・探求心・課題設定力の重要性を再認識し、自己理解を深める機会となりました。自身の強みや志向、社会貢献と自己実現の両立可能性を実感し、有意義な経験だったと報告しました。



基調講演「イノベーションと文化の溝」

国際日本文化研究センター所長 井上 章一 氏

井上氏のご講演では、自身がパソコンやスマートフォンを持たず、原稿も手書きで執筆するという立場から話を始められました。周囲に迷惑をかけている自覚はありつつも、デジタルから距離を置く姿勢は単なる懐古ではなく、デジタル化が見落としがちな事象を拾うための戦略であると述べられました。若い研究者から「検索しても出てこない情報をどう集めているのか」と問われた経験を紹介し、現地観察や一次資料から得られる気づきこそ独自性につながると強調しました。

事例として、20世紀半ば以降に形成された「パンツが見えて嬉しい／恥ずかしい」という感受性の歴史を、古雑誌や1980年代の上海での観察から読み解いた研究を紹介。また、ブラジルの病院で「靴を脱ぐ／脱がない」をめぐる体験から、日本文化の“最後の防衛線”としての「畳に靴」意識に触れました。さらに、奈良時代の歴史区分が東大・京大・旧ソ連で異なる例を示し、常識は相対的であり、比較によるズレや違和感が問いを生むと指摘しました。

食文化にも言及し、たらこスパゲッティや、海外の独特な“和食”を例に、文化の混淆を創造性の土壌と評価。伝統の厳密な再現にこだわるだけでなく、偶然の発明や越境を受け入れる寛容さが必要だと述べました。

総じて、異文化とのズレや日常の違和感こそが新たな発想の源であり、当たり前を疑い、文化の境界に身を置く姿勢がイノベーションを生むとの示唆が示されました。



座談会「イノベーションは心を豊かにできるか」

国際日本文化研究センター所長 井上 章一氏
× C-ENGINE代表理事 國府 寛司（京都大学理事・副学長）



國府氏は、靴文化の違いを例に文化的感受性の差に言及し、井上氏も欧米では「全裸でも靴を脱がない」ストリーキングの例を挙げ、文化的無意識の違いを示しました。エリザベス女王が龍安寺で靴を脱いだ逸話を紹介し、文化的振る舞いの象徴性に触れました。

國府氏は講演の要点を「文化の溝が新しい発想を生むこと」と整理し、C-ENGINEの研究インターンシップも、大学と企業という異なる文化の接点として機能していると述べました。井上氏は、社会経験を経て大学に戻る学生の文章力や表現力に触れ、現場経験が思考を柔軟にすると語りました。

「ぼーっとする時間」の価値についても意見が交わされ、國府氏は数学研究にも通じると共感。井上氏は「成果につながらないことも多いが、着想は多くがぼーっとしている時に訪れる」と述べ、社会全体が“余白の時間”を肯定する重要性を強調しました。

議論は文理融合にも及び、國府氏の「文系研究と科学技術の接点から何が生まれるか」という問いや、会場からの文理融合・異分野連携に関する質問に対し、井上氏は、歴史的にも“脱藩者”が時代を動かしてきたと指摘。「自分の専門に縛られず興味に従うことが真の融合であり、既存の枠から脱藩する勇気が必要」と語りました。最後に國府氏は、イノベーションはしばしば不安や摩擦を伴うが、その中からこそ人の心を豊かにする創造が生まれると述べ、対談を締めくりました。

閉会挨拶

C-ENGINE理事 古藤 悟（三菱電機(株)研究開発本部シニアフェロー）

シンポジウムへのご参加に感謝を述べ、来賓や講演者、学生発表者への謝意を示しました。テーマ「イノベーションは心を豊かにできるか—日本文化という視点で考える」に触れ、技術革新だけでなく文化・感性・地域性を取り込む重要性を再確認。井上氏の示唆を踏まえ、デジタル時代における“見落とされがちな価値”をどう見出すか、産学で引き続き検討していく姿勢を示しました。本協議会の活動への理解と参画を呼びかけ、参加者の今後の活躍を祈念して締めくりました。



ご参画ご検討中の皆様は、是非お試し会員制度をご利用ください

<https://www.c-engine.org/2025/06/27/11550/>

